

ーオーディオ史上初の波形再現スピーカーシステムについてー  
くある「老オーディオマニア」の無謀な挑戦の物語の紹介>

弁理士 阿仁屋節雄

世間では「オーディオマニア」という言葉自体が、もう死語になっているのかもしれない。ただ、Facebookなどを覗くと、僅かな生き残りが、いまだ血気盛んにやっていることを確認できる。

筆者もその端っこで、勝手に投稿させてもらっている一人ではある。がしかし、ほかの方々の投稿内容とは少しばかり違って、オーディオ史上初の無謀な挑戦の記録である。



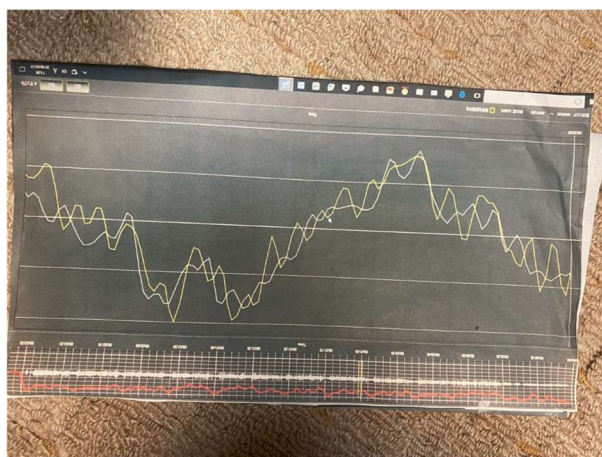
つまり、ほかのオーディオマニアの方々は、概ね、昔ながらのウエスタン・アルティック・JBL や、今どきの豪華なハイエンド機器や、一時流行った自作派機器などに関する投稿である。これに対し、筆者の投稿は、「オーディオ史上初」の「波形再現スピーカー（SP）システム」の開発、という、専門家がズッコケルほどに大上段の投稿である。

これがどれほど画期的か（本人が言うのだから間違いないのだが（笑））は、以下の事実から明白である。

まず、現状のオーディオ装置の「波形再現率」は、どんなハイエンドのものでも概ね60～70%内外が関の山である。しかるに、「波形再現 SP システム」の波形再現率は、99%以上（ほぼ100%）なのである。

と、いきなり言っても、だからなんなのよ？ということになって、あまりピンとこないかもしれない。（笑）なので、「波形」のことを少しばかり、説明させていただきたい。ここでの「波形」とは、CDなどのソースに刻まれている「音楽波形」そのもののことである。

実は、CDなどのソースには、「音」の情報としては、「波形（波形1）」しか記録されていない。例えば、レコードでは、あの一本のギザギザ溝がその波形そのものなのである。つまり、「波形（波形1）」が、記録されている「音（記録音）」の全てなのである。我々は、この「波形（波形1）」をアンプで増幅し、スピーカー（SP）を駆動してスピーカーから空中を伝搬する現実の「音（音楽）」を飛び出させ、それを聴いて楽しんでいるのである。



ここで、この SP から飛び出た「音（再生音）」をマイクで検知して記録（録音）すると、その記録物はやはり「波形（波形2）」である。「波形再現率」というのは、ソースの音の「波形1」と、その再生音の「波形2」との一致率を意味している。つまり、このことは、そのオーディオシステムが、実際に聴く「音楽波形」を、何パーセントの精度で再現しているのか？を、ズバリ、定量的に示すことになる。測ることができた全ての現状のオーディオシステム（多分、同じ原理の現状の他の全てのシステムも似たりよったりと推定できる）が、70%未満であったのに対し、波形再現 SP は、ほぼ100%を実現できた、ということで、画期的なのである。



では、その今まで誰も聞いたことのない100%の音は？

残念ながら、この世のものとは思えない「妙なる音」でもなければ、度肝を抜かれるような「ド迫力の音」でもない。がしかし、例えば、以下のようなことは言えるかもしれない。

- 自然で本来の正しい音であろう、と思わせてしまう音
- これ以上はないと思わせてしまう分解能・分離能感
- 完璧なレスポンス・追従性感
- 完璧なバランス感
- 部分的に強調されたり弱められたりして音像のアンバランスを感じさせたり、厚化粧を思わせるような不自然さが一切ないダイレクト感
- メッキやヴェールが完璧に剥がされ、かつ、あいまいさや濁り感などを一切感じさせない地肌のような音

実は、このような感想を持つのは当然の帰結なのではある。何ゆえなら、波形再現率100%を実現するためには、結果的に、周波数特性曲線も位相特性曲線も定規で引いたように完璧に一直線となるような完璧に理想特性でなければならなかった、ということだからである。

以上